

国土交通省近畿地方整備局様
淀川水系流域委員会様

2007. 10. 31

宇治市菟道
山岡 久和

質問・意見

1. 再質問・779で質問いたしましたのは、昭和46年当初の淀川水系河川整備計画では宇治地点（50.5 km）は基準点でなかったのですか、教えてください。もし、基準点でありましたらそれが主要な地点にいつから変わったのか理由を説明していただきたい。

それでは天ヶ瀬ダムにおける洪水対応と塔の島地区における 1,500 m³/S 放流問題について質問します。

1. 淀川、宇治川の洪水時に琵琶湖の水位が上昇しているにもかかわらず、瀬田川洗堰は、淀川、宇治川の流量を低減させるために放流制限または全閉操作をおこなわれるとの説明ですが、現時点において、戦後最大の降雨があれば天ヶ瀬ダムで洪水対応を行なわれ、これに対応して瀬田川洗堰の水位操作が行なわれますが、この戦後最大の洪水(5313)に対して琵琶湖の水位上昇は何センチで、貯水量は何万トンになるのですか、具体的に説明していただきたい。

同じ条件で洗堰が全開したら琵琶湖の水位は何センチ下がりますか、その効果について教えていただきたい。

2. 琵琶湖の水位上昇による浸水被害の実態については琵琶湖総合開発事業等によりほぼ解消されており、現状の浸水被害（床下浸水）は内水排除の問題であると聞いておりますが、徐々に上昇するわずか数センチの水位を下げるために瀬田川・洗堰・鹿跳び溪谷・天ヶ瀬ダム再開発事業・塔の島地区の開削を行ったから完全に解決するものでも無いと聞いておりますが、戦後最大の洪水に対して琵琶湖の浸水被害にどれ位の効果があるのか具体的に説明していただきたい。
3. 琵琶湖の浸水被害といわれる、わずか数軒（床下浸水）の移転等の補償や元々水陸移行帯としての農地補償、もしくは内水排除等の対策で解決できるように思いますが、費用対効果と環境の視点から検討していただいていると思いますので、金額と関係する機関との協議状況を示して説明していただきたい。
4. 宇治川についてお尋ねします。まず、基本高水ピーク流量が宇治地点において工事実施基本計画では2,800 m³/S ありますが河川整備基本方針では2,600 m³/S に、また、計画降雨量についても下方修正がされています。これらのことは宇治地点における 1,500 m³/S の流下能力とどのようにかかわっているのか説明をしていただきたい。

5. 宇治川の戦後最大洪水は昭和 28 年 9 月の洪水時の最大到達流量は約 $1,100 \text{ m}^3/\text{S}$ と想定され、 $1,500 \text{ m}^3/\text{S}$ は宇治 1/150 計画規模の洪水の流量であるとの説明ですが、今回の整備計画は 20~30 年を目標に定めるのでありますが、この目標でも、今までの実績からして全ての整備が出来るとは思いませんが、何故、最終目標の 100 年とも 200 年ともかかると言われる「淀川水系河川整備基本方針」の目標を持ち出されるのかわかりません。
もっと時間をかけて多くの意見を反映させる努力と検討をすべきことであると思いますが、何故、急いで $1,500 \text{ m}^3/\text{S}$ の開削を行いたいのか説明をしていただきたい。
6. 天ヶ瀬ダムの放流量増大は、水系全体として戦後最大洪水に対応すると共に琵琶湖の後期放流のために必要となるもの言われていますが、天ヶ瀬ダムからの放流量は $1,140 \text{ m}^3/\text{S}$ で、宇治地点までで $300 \text{ m}^3/\text{S}$ 流入することになってありますが宇治発電所の $60 \text{ m}^3/\text{S}$ は示されていますが、その 5 倍の流量がどこから流入するのかわかりません。具体的に説明をしていただきたい。
7. $1,500 \text{ m}^3/\text{S}$ は山科川合流点上流からの流出量が含まれるとの説明でありましたが、それでは、弥陀次郎川、戦川、白川、志津川、カット排水、樋門、樋管、発電放流等から流入する流量は天ヶ瀬ダムからの放流量をコントロールされることと思いますが、その総水量をどのようにして確認されますか説明をしていただきたい。
8. 天ヶ瀬ダムの発電放流量 ($186.4 \text{ m}^3/\text{S}$ の水利権あり) はダムからの放流に含まれるとの説明ですが、今日まで発電放流されていますが、天ヶ瀬ダムの放流量はゼロであります。
天ヶ瀬ダムの放流量としていくらかからカウントされるのか、また、公表されていないだけなのか説明していただきたい。
9. 塔の島地区の整備の説明で塔の島地区河川整備に関する検討委員会の審議を踏まえ、最小限の掘削とし、最深河床部約 0.4m で対処する方針とありますが、この委員会を傍聴していましたがこのような結論にはなっていなかったのではないかと。そこでお尋ねしますが、もし、流域委員会委員も誰も知らない具体的場所も解らない河床最深部 0.4m 掘削することになるならば現状からして $2\text{m}\sim 3\text{m}$ の掘削になり、宇治川の戦後最大の洪水流量よりはるかに大きい琵琶湖の後期放流 $1,500 \text{ m}^3/\text{S}$ のための放水路になるのではないかと危惧しています。
少なくとも、まず、一般の人々が判る現況平面図に両岸部の現況横断図 ($1/100\sim 1/200$ 位) 複数ヶ所に計画ラインを示して説明するべきだと思いますので説明をしていただきたい。
現在示されています 51.2K 付近の断面模式図では、流域委員会委員も含めて誰も解らないと思います。
10. 河川整備計画策定にあたっての基本的考え方として水、生物、人、まちづくりなどとのつながりをもった川とするとともに、住民等の参画や情報の共有を推進していく。「生態系が健全であってこそ、人は持続的に生存し、活動できる。」と

の考え方をふまえて河川環境保全・再生を図り次世代に適切に引き継げるよう勤める。また、河川環境の保全・再生は「川が川をつくる」ことを手伝うという考え方を念頭に実施していく。特に、水陸移行帯の保全・再生をはじめとして河川の縦断・横断方向の連続性が分断されている状況を修復し、さらには河川・湖と陸域の連続性を確保する。と述べられていますが $1,500 \text{ m}^3/\text{S}$ を流せるようにするため、宇治川の狭窄部である塔の島付近を改変されてきましたが、それでは、塔の島地区で今まで行われてこられた河川整備工事等で、生態系と景観について、この視点(基本的な考え方)で従前より良くなったことについて具体的に説明していただきたい。